〈つなぐ〉こと，〈はなす〉こと

―『聖ドミンゴ島の婚約』における „binden“ の考察 ―

杉林　周陽

1．はじめに

ハインリッヒ・フォン・クライストの散文作品である『聖ドミンゴ島の婚約』（以下『婚約』）[1] は，フランス占領下にあった聖ドミンゴ島，現在のハイチを舞台に起きた，いわゆるハイチ革命に取材している。まずはその梗概を示しておこう。

聖ドミンゴ島にハイチ独立革命が起きたとき，フランス軍の青年将校グスタフ・フォン・デア・リートは，叔父のシュトレームリ氏一家と共に，島から脱出するために港町へと逃げていた。その途中で黒人ホアンゴの屋敷に助けを求めにやって来るのだが，そこでメスティーソの娘トーニと出会う。彼女は母ババカンと継父であるホアンゴに強いられ，彼らの復讐心の餌食にするため，白人たちを屋敷へと誘い込む役をさせられていた。ちょうどホアンゴが不在であり，彼が戻ってくるまでの時間を稼ぐため，彼女は母に命じられてグスタフに足湯を用意する。こうして二人きりになったとき，トーニはグスタフの命を救うために犠牲になった彼の婚約者マリアーネの話を聴き，さらにその死を悲しんでいる彼の姿を見ているうちに人間らしい感情が湧き，一夜を共にする。これを境にして，やがてトーニは彼を救い，その妻としてヨーロッパに行きたいと願うようになる。しかし，想定していたよりも早いホアンゴの帰還により窮地に陥ってしまったトーニは，グスタフを助けるために一計を案じ，眠っている彼をベッドに縛りつける。これは，そうすることで彼が黒人たちと戦って命を落とす危険を回避し，さらにシュトレームリ氏らを連れて来る時間を稼ぐためであった。そしてトーニは，無事に彼らを屋敷へと引き込み，ホアンゴたちを倒し，グスタフを助け出す。しかしトーニの真意を理解できなかったグスタフは，彼女が自分を裏切ったと思い込み，彼女を射殺する。その今際の際の言葉で自分の過ちを悟ったグスタフは，後悔のあまり，自ら命を絶つ。

このように悲劇的な結末を迎える本作品は，その原題を „Die Verlobung in

1） クライストのテクストは以下のものを使用し，引用には略号 SWB と，アラビア数字で巻数，ページ数を示した。Kleist, Heinrich von: *Sämtliche Werke und Briefe*. Hrsg. von Helmut Sembdner, Neunte, vermehrte und revidierte Aufl. 2 Bände, Carl Hanser Verlag, München 1993.

St. Domingo“という。Adelung を引いてみると，この題名にある „Die Verlobung“ の元になっている動詞 „verloben“ には「誓い・改まった約束によって誰かと結びつける」[2] という意味が載っている。さらに，梗概にも示した通り，トーニがグスタフを救うために彼をベッドに縛りつけたことが物語に悲劇的な結末をもたらす切っ掛けとなっている。これもまた，この題名との関係を思わせるものだと言えよう。

以上のようなことがあるためか，これまでの研究において „binden“ や „Bann“ といった〈つなぐ〉ことを表す語，そしてそれらと対を為す „befreien“ や „Emanzipation“ といった〈はなす〉ことを表す語からの視点に立ったものが見られる。[3] 本論もこれらの単語に注目して考察をしていく。

2．〈束縛〉を表すものとしての衣服

ｉ）役割への〈束縛〉

『婚約』では聖ドミンゴ島を舞台に白人勢力と黒人勢力が争っており，そこでグスタフは白人側，トーニは黒人側に属した形で登場する。しかし，既に見た通り，これは彼女に関して言えば一貫したものになっていない。当初は黒人社会の中にいたトーニは，やがてグスタフを愛するようになり，彼を危機から救うためにそこを飛び出していく。その結果として黒人たちを裏切ることになった彼女は，それを咎める親たちを前にして「私は白人です」[4] と宣言する。このような彼女の変化を追っていくと，〈つなぐ〉ことと〈はなす〉ことが印象的に用いられていることがわかる。それを見ていこう。

当初トーニは白人たちをホアンゴの屋敷の中へと引き込む役割を与えられていた。グスタフが屋敷を訪れたときも，彼女にその役を全うさせるため，

2）　http://lexika.digitale-sammlungen.de/adelung/lemma/bsb00009134_5_0_555

3）　例えばヨッヘン・シュミットは，「あらゆる現在の出来事は過去の呪縛（Bann）の内にあり」，登場人物たちが過去に囚われていると指摘している。（Vgl. Schmidt, Jochen: *Heinrich von Kleist. Die Dramen und Erzählungen in ihrer Epoche*. Darmstadt 2003, hier S. 250.）またハンス・ペーター・ヘアマンはこの物語にトーニの「解放（Emnzipation）」（Vgl. Hermann, Pans Peter: Die Verlobung in St. Domingo. In: Hinderer, Walter (Hrsg.): *Kleist Erzählungen*. Stuttgart 1998, S.111-137, hier S.123.）を見ており，他にヨハネス・ハルニシュフェーガーも，グスタフとトーニが自身の意志や感情に従い「彼らの家族との従属から離れ（gelöst）」（Vgl. Harnischfeger, Johannes: Das Versprechen romantischer Liebe. Zu Kleists ›Verlobung in St. Domingo‹. In: Kleist-Jahrbuch. 2001, S.278-291, hier S. 289.）ている点を挙げている。さらにヘルガ・ガラスは，まさにこの „binden“ と „lösen“ をテーマに『婚約』を論じている。（Vgl. Galls, Helga: *Kleist. Gesetz, Begehren, Sexualität. Zwicshen symbolischer und imaginärer Identifizierung*. Frankfurt am Main/ Basel 2003, S. 94-109.）

4）　SWB. 2, S. 191.

母親が衣装を用意し，身支度を調えてやっている。

> […] そうしてトーニが立ち上がり，上着や靴下を身に着けている間に […] 彼女は素早く少女の髪を土地の流儀に従い，頭の上で結わえ（sie […] *band* dem Mädchen geschwind das Haar, *nach der Landesart*, über dem Kopf *zusammen*），胸当てを結んでやった（sie ihr den Latz *zugeschnürt* hatte）後で，帽子をかぶせてやり，手にランタンを持たせ，そして中庭へ下りていき，異国の男を中へ連れてくるように命じた。[5)]

この引用箇所に見られる „zusammenbinden“ は，ここでは「髪の毛を結わえる」ということであるが，文字通りに解釈すれば「集めて」〈つなぐ〉ということになる。また „zugeschnürt“ も見逃せない言葉である。これはバベカンがトーニに胸当てを着けてやるところで使われている。彼女はその容姿もあり，黒人たちの白人たちに対する「残忍な企てのために特に役に立ったので，一番良い服で着飾」[6)] らされることになっていた。バベカンがトーニの体に結んでやっている胸当ては，まさにその「一番良い服」であろう。このようにして着飾らされることは，トーニにとっては策略に加担させられることを意味する。この引用の部分で注目したこれらの動詞は，確かにトーニの身なりを調えることを表している。だが，その目的と関連させて考えた場合，これは彼女が母によって，策略のために〈束縛〉されていることを暗示していると解釈することができる。

この考えを裏付けるものとして，次にトーニがグスタフと二人きりになったときに誘惑されている場面を挙げたい。

> その間に少女は，おかしなことに，誰かが廊下を通って部屋へと近づいてきているかのように，突然耳をそばだてながら立ち上がった。彼女は物思いにふけり，ぼんやりとしながら，彼女の胸の上でずれてしまっていた胸当てを整えた（sie rückte sich gedankenvoll und träumerisch das Tuch, das sich über ihrer Brust verschoben hatte, zurecht）。そしてそれが勘違いであるとわかると，ようやく彼女は少し明るさを浮かべながら，再び異国の男の方へ向き直り，すぐに使わないのであれば，お湯が冷めてしまいますよ，と言った。[7)]

5）SWB. 2, S. 162. 強調は筆者。
6）SWB. 2, S. 161.
7）SWB. 2, S. 173.

トーニはバベカンに命じられて，グスタフに足湯を用意している。その姿に見とれたグスタフは「その気があるかないかを試」[8] そうと彼女を誘惑しようとするのだが，それに続くのがこの引用箇所である。ここでトーニは彼女の胸の上でずれていた胸当てを「整えて（zurechtrücken）」，すなわち「正しい位置（zurecht）」に「動かして（rücken）」いる。

ここでトーニがグスタフに足湯を持ってきて，足を洗ってやっているのは，彼をホアンゴが屋敷に帰ってくるまで引き留めておくための策略である。しかしながら彼女はグスタフに惑わされ，自分が為すべきことを忘れそうになってしまう。まさにそのとき，自分のいる部屋へと誰かがやってきているような気がして，胸当てを「正しい位置」に直している。

上で見た通り，この胸当てはバベカンが彼女に着けたものである。そしてその身なりは白人を罠にかけるために整えられている。また，ここまで彼女がグスタフに対して行っていることは全て，白人に対して復讐をしようとしている母に命じられてのものである。つまり，ここで彼女が為さねばならぬことはグスタフに誘惑されることではなく，母の命に従って行動することだ。彼に誘惑されそうになっているうちにずれて，すなわち「正しくない位置」に動いてしまった，母に着けられた胸当ては，まさに彼女が母の目的に対して「正しくない位置」にあることを表しているのだと考えられる。[9] だからこそ彼女は胸当てを「正しい位置」に直したあとで，母に命じられた足湯のことを話題にし直すという，目的に対して「正しい位置」に自分を「動かす」のだ。

ⅱ）感情の〈束縛〉

ここまで見てきた通り，トーニに関して衣服は，策略を目的とした母から娘に向けられた〈束縛〉を表していると解釈できる。だからこそ〈束縛〉された彼女は，自分の「一番奥にある感情」[10] を表に出せない。それを示しているのが次に挙げる箇所ではないか。グスタフは亡き婚約者の話をする直前でトーニを見つめるのだが，そうすると彼女は「胸当てをいじりながら，彼女をとらえた戸惑いを隠そうとする（[…] suchte, indem sie sich mit dem Latz beschäftigte, die Verlegenheit, die sie ergriffen, zu verbergen）」。[11] 書かれてある通り，これは戸惑いや困惑を表す仕草として見るべきなのかもしれない。し

8）SWB. 2, S. 172.
9）Vgl. Breuer, Ingo (Hrsg.): Kleist Handbuch, J. B. Metzler'sche Verlagbuchhandlung und Carl Ernst Poeschel Verlag GmbH, Stuttgart 2009, hier S. 126.
10）SWB. 2, S. 177.
11）SWB. 2, S. 173.

かし，敢えて解釈の可能性を考えるならば，ここでトーニはそうした彼女の感情を胸当てで隠そうとしているのではないか。この「胸当て」は物理的な彼女の「胸」を隠すだけでなく，心理的な彼女の「胸」も隠しているのではないか。そうであるならば，胸当てが「正しい位置」に無いときに，トーニがグスタフに誘惑されそうになっていることにも説明がつく。このとき，彼女は母の〈束縛〉から，部分的にではあるが〈解放〉されているということなのだ。そうして自分の感情に目を向けることができたからこそ，トーニはグスタフが婚約者の話を語り終えたときに感極まっている様子を見て，「多くの面から呼び起こされた人間らしい感情にとらわれ（übernahm sie, von manchen Seiten geweckt, ein menschliches Gefühl）」[12] ることになるのではないか。そして，彼らは肌を合わせ，身体的な距離をゼロにすることによってお互いを〈つなぐ〉。こうしてグスタフと〈つながった〉トーニは大きな変化を見せるようになる。

> あなたたちが私に関わらせた非人間的なことが，長い間，私の一番奥にある感情に障っていたのよ。これまでに起こったことで神の報いを受けないように，そのためには，誓ってもいいけれど，私はあの青年が私たちの屋敷にいる限り，その髪の毛一本ほどでも傷つけられることを許すくらいなら，十回死んだ方がましです。[13]

トーニは母親に対して以上のように告げている。だが，ここで疑問が生じる。なぜ彼女は「長い間」「一番奥にある感情」を口にすることがなかったのであろう。なぜ，ここにきて彼女は突然それを口にすることになったのであろう。

やはりここでもグスタフと〈つながった〉影響が見られるのではないか。そしてこの推測を支えるのが，上の引用に続く場面で，トーニが自分で服を着ているという点である。この行為が意味しているところは，以降のトーニはこれまで見てきたトーニと違い，母に着せられたままの身なりをしていないということだ。既に考察したように，衣服は彼女を策略のために〈束縛〉するものであった。上の引用箇所で彼女が自分の「一番奥にある感情」に初めて言及している点も考慮に入れると，もはや彼女には，これまでのような〈束縛〉はなくなっているのではないか。つまり，このトーニは黒人社会とのつながりから解き放たれているのではないか。だからこそ，トーニは母か

12）SWB. 2, S. 175. 傍点強調は筆者。
13）SWB. 2, S. 177.

らの〈束縛〉を身にまとっていないときには「自分の心の声を妨げるものを全て無視する」[14] ことができるのだ。そのため「彼女のグスタフとの結びつきは，家族の影響を受けることなく，そればかりか彼らの意思に反して実現」[15] することになる。

3．〈束縛〉を表すものとしての十字架

もう一つ忘れてはならないものがある。それはグスタフがトーニに贈った十字架だ。

> […] 彼は十字架を，彼が言うところでは婚約の贈り物として，彼女の首に掛けた。[…] 彼は彼女に誓った。君への愛は，決して私の心からは無くなったりしない […]。彼はもう一度彼女を私の愛する花嫁と呼んだ […]。[16]

かつて自分を救うために犠牲となって亡くなった婚約者マリアーネの形見である十字架を，彼は「婚約の贈り物（Brautgeschenk）」として彼女の首に掛けてやっている。それに加えて，彼は彼女への愛が決して自分の心からは無くならないなどと誓ったり，彼女を「私の愛する花嫁」とまで呼んでさえいる。物語の最後に，グスタフは「君は誓いによって僕と婚約していたのだ。僕たちはそれについて一言も交わしはしなかったけれど」[17] と言っているが，この „Liebesnacht“ 後のグスタフの様子から考えると，その「婚約」が実際に行われたのはこの機会であろう。「婚約」，すなわち自分を「誓いによって誰かと結びつける」ことができなかった二人ではあったが，それでも互いに結びついていることを象徴的に表しているのが，この十字架だと言えよう。

だが一方で，この十字架には別の意味も見出せる。彼はこの十字架によって彼女を「白人のアイデンティティーに縛りつけている」[18] という指摘がある。グスタフによってトーニが〈束縛〉されていることを，この十字架が表しているということだ。確かにこの後，彼女はマリアーネを手本とし，同じように彼のために犠牲となって死ぬ道を歩み始める。[19] そのトーニは「彼を救うために立てた計画の最中に死んでしまうことを考えると，嬉しくなっ

14）Vgl. Harnischfeger, S. 282.
15）Ebd.
16）SWB. 2, S. 175 f.
17）SWB. 2, S. 193.
18）Vgl. Breuer, hier S. 125.
19）Vgl. Müller-Salget, Klaus: *Heinrich von Kleist.* Stuttgart 2002, hier S.156.

て」[20] しまう。こうした彼女の想いには，まさしく亡き婚約者の影響を見ることができるだろう。そうだとすれば，このトーニもまた，〈束縛〉されていると考えられる。ただし〈束縛〉されているのは「白人のアイデンティティー」ではなく，グスタフによって与えられたマリアーネの役割にである。上で見たトーニの様子に注目した場合，そう考える方が妥当であろう。

4．〈解放〉としての告白

ついにトーニは自分がした罪を告白しようとする。そして，そのための力を得ようと「救世主（den Erlöser）」に願う。

> 彼女は救世主（den *Erlöser*），その神の御子に，尽きることのない情熱を込めて祈りながら，自分が身を捧げた青年に彼女の胸を苦しめる罪を告白する（das Geständnis der Verbrechen, die ihren jungen Busen beschwerten, *abzulegen*）勇気と揺るがない気持ちを願い求めた。[21]

ここにある „der Erlöser“ とは „erlösen“「救済・解放する」ものである。さらに「罪を告白する（das Geständnis abzulegen）」ということは，文字通り「彼女の若い心に重くのしかかっていた（ihren jungen Busen beschwerten）」ものを「取り除く（ablegen）」ことである。ここにもまた母親の〈束縛〉から自分を〈解放〉することを意味しているかのような言葉が使われている。彼女が犯し，その心の重荷となっている罪は，彼女が自発的にしたものではない。それはバベカンたちから関わることを強いられたものであった。母によって着せられた服ではなく，自分で着た服を身に着けているトーニは，上述した通り，もはや母親に〈束縛〉された状態にはない。その彼女が今，自分自身を「解放する（erlösen）」ために母親たちに背負わされた罪という重荷を「下ろそう（ablegen）」としているのだ。[22]

20）SWB. 2, S. 187.

21）SWB. 2, S. 183. 強調は筆者。

22）上でも指摘した，バベカンに命じられたトーニがグスタフに足湯を用意する場面で，彼は「気に入らない肌の色を除いて」（S. 172.）彼女を美しいと思い始めている。そうして身体的に密着しているうちに，「彼女の優美さと愛らしさに心を動かされ」（S. 173.）ていき，ついには「神の手によってあらゆる不安から〈解放され（*erlöst*）〉，彼女を抱きしめる。」（S. 173.）そればかりか，彼はトーニの心を誤解していた自分を責めさえする。このようなグスタフの内面の変化が見られる場面で，まず彼は「スカーフとベストを取って（von der Halsbinde und Weste befreite）」いる。これらは将校の制服だと考えられるが，それから自分を „befreien“，すなわち〈解放〉しているところは注目しておくべき部分だろう。なぜならば，この衣服を脱ぐという行為はすなわち，フランス軍将校という彼を形成する要素の象徴とも言うべきものから自分自身を〈解

このようにしてトーニは母親たちの〈つながり〉から自身を〈はなす〉ことを目指している。そしてそれが成功したことは，以下の場面に表されていると言えるだろう。

> トーニに関する老婆の知らせに未だ信を置いていない黒人の男は，言われた部屋から彼女が出てくるのを見たとき，驚き，動揺して，松明と武器を持った自分の一味共々，廊下で立ち止まった。そして彼は「この不実な女。裏切り者め（die Treulose! *die Bundbrüchige*!）」と叫んだ。[23]

ホアンゴがトーニに対して発した „die Bundbrüchige“ は，文字通り „Bund“ を „brechen“ する，つまり〈つながり〉を「切る」ことを意味する。ここで言う „Bund“ とは，もちろん黒人たちとのつながりであろう。そのように彼女を「縛りつけて（binden）」いたものから自身を〈解放〉しているからこそ，彼女は „die Bundbrüchige“ なのだ。

既に確認した通り，トーニはグスタフによって「婚約の贈り物」としての十字架を首に掛けられている。この十字架は，一つには二人が結びついていることを象徴的に示すものである。だからこそ，トーニは彼のことを「単なる客人としてでなく，自分の婚約者（Verlobten）であり，夫である」[24] とまで考えるようになっている。本論の冒頭でも触れたが，„verloben“ には他者と結びつくという意味が含まれている。ここにもトーニがバベカンたち黒人の側から解き放たれており，グスタフと結びついていることが明確に示されている。だからこそ，トーニはこう宣言するのだ。

> 「私はあなたたちを裏切っていません。私は白人です。そしてあなたたちが捕らえている青年と婚約しているのです。私は，あなたたちが公然と争っている人種の人間なんです […]」[25]

こうまで言うトーニは，自分がグスタフの妻としてヨーロッパへと連れて行ってもらえるようにと願っていたのだが，それが叶うことはない。

きはなす〉ことになっていると考えられるからだ。トーニにとっての衣服と同じように，これは彼が自分とフランス軍という白人社会を〈つなぐ〉ものから自由になることを意味しているのではないか。だからこそグスタフはトーニに「心を動かされ」，さらに「不安から解放され」，ついには一夜を共にすることになる。

23）SWB. 2, S. 185. 強調は筆者。

24）SWB. 2, S. 181.

25）SWB. 2, S. 191.

５．おわりに

〈つなぐ〉ことと〈はなす〉ことが繰り返され，確かに一見，ヘアマンが指摘した通り，トーニはそれまで自分を抑圧していた，〈束縛〉していた母たちによって与えられた役割から〈解放〉されているように見える。しかし，それは同時に彼女が別の役割に〈束縛〉されることを意味する。グスタフから亡き婚約者の形見を与えられることによって，彼女はその婚約者が果たした役割に縛られることになっている。また，シュミットは登場人物たちが過去の〈呪縛〉の下にあると指摘しているが，トーニはそれとは違うように見える。一見，彼女もそのような立場にあるように見えるかもしれない。しかしそれは，彼女の周りにいる者が，彼女に自分たちの過去の〈呪縛〉を背負わせているからに過ぎない。彼女が「救世主（Erlöser）」によって〈解放（erlösen）〉されようとしたものは，上述の通り母に強いられ，犯した罪であった。つまり，母の過去の〈呪縛〉を背負わされていたということである。そして，既に見た通り，グスタフから貰うマリアーネの十字架についても同様である。これによってトーニは，グスタフの過去の〈呪縛〉であるマリアーネの役割を引き受けさせられている。

このように，『婚約』は〈束縛〉されていた少女が「自分の本心」に気づき，そこから脱していく姿を描いたものではない。本人はそれができたと思っていたにもかかわらず，また新たに〈束縛〉されてしまう姿を描いているのだ。そのようにしてこの作品を捉え直してみると，その最期がより一層悲劇的なものに見えてくるだろう。

„binden“ und „befreien“

— Eine Betrachtung über „binden“ in „Die Verlobung in St. Domingo“ —

Noriaki SUGIBAYASHI

Das Wort „verloben“, das im Titel der Novelle von Heinrich von Kleist „Die Verlobung in St. Domingo“ steht, bedeutet ursprünglich, dass man sich durch ein Gelübde oder feierliches Versprechen mit jemandem verbindet. In dieser Novelle können viele Wörter, die sowohl mit „binden“ als auch mit „befreien“ zu tun haben, gefunden werden. In diesem Beitrag geht es darum, was sie für Bedeutungen haben.

Toni wird von ihrer Mutter das Haar nach der Landesart zusammengebunden und der Latz zugeschnürt. Damit ist Toni an ihre List, sich an den Weißen zu rächen, gebunden. Während der Verführung Gustavs verschiebt sich das Tuch über ihrer Brust, darum rückt sie es zurecht, aber dabei vergisst sie das, was ihre Mutter angeordnet hat. Ihr Benehmen „zurechtrücken“ bedeutet, dass sie sich selbst wieder in die „rechte Position“ bringt, weil sie zu der List von Babekan in „unrechter Position“ steht.

Gustav schenkt Toni ein goldnes Kreuz, das seine verstorbene Verlobte hintergelassen hat. Damit wird das Mädchen von ihm an sie gebunden und nimmt sie sich zum Vorbild.

Nach der Liebesnacht schenkt Toni dem Willen der Mutter keine Beachtung mehr und beschließt, Gustav zu retten. Dabei kleidet sie sich selbst, nicht mit Hilfe der Mutter, an. Dadurch wird deutlich, dass sie sich nun von den Bann ihrer Muter befreit hat. Sie will auch versuchen, Gustav gegenüber ein Geständnis über die Verbrechen, zu denen sie von der Mutter gezwungen wurde, abzulegen. Diese Toni nennt der Stiefvater „die Bundbrüchige“. Dieser „Bund“ ist den „Bund mit den Schwarzen“. Sie bricht jetzt „den Bund“, deshalb muss sie von ihm „die Bundbrüchige“ genannt werden. Toni selbst ist „Mestize“, und besteht darauf, dass sie eine Weiße sei.

Diese Geschichte könnte als eine Geschichte der Emanzipation von Toni gedeutet werden, denn es ist ihr gelungen, sich von den Schwarzen sowie ihrer Mutter zu befreien. Aber in der Tat wird sie nicht emanzipiert, sondern immer noch gebunden.